

学校図書館における漫画の取り扱いの再検討

小出 晋之将（文学研究科比較文明学専攻）

1. はじめに

近年、漫画を取り巻く文化状況は変化し、漫画を用いた学習や学術研究への利用なども語られ始めている。幾つかの公立図書館で「まんが」の配架が行われてきているのは事実であり、漫画が他の図書とは異なる文化教育の一部を担保している。

児童・生徒の漫画の読書状況に関しては既に別個に検討したことではあるが、毎日新聞の読書量調査には、メディアの多様化という社会状況の変化により、漫画を含めた読書量の減少の兆しを見ることができる。とはいえ、漫画雑誌は他の雑誌と比較していまだに児童・生徒にとって読まれる対象として選択されている¹⁾。学校図書館は漫画を置かないことを前提としていたが、こうした文化教育の要請を受けて評価の基準の必要性が生まれ、全国学校図書館協議会（全国 SLA）の図書選定基準には漫画に関する条項が加えられた²⁾。

だが、この評価基準が、実際に有効に機能しているか、という点を問うならば、疑念を呈さざるをえない。2012 年の松江市議会民生教育委員会への陳述第 46 号³⁾に端を発する教育的配慮を冠した『はだしのゲン』閉架要請は、まさに選定基準及び選定過程における学校図書館関係者、図書評価者の不在をうかがわせるものであった。この処置は「文章や絵の過激さ、不適切さに関して」取り上げられ、一時は不採択の決議がなされたが、最終的に閉架要請が口頭で行われ、市内で『はだしのゲン』を保有する 39 の小中学校全校がそれに応じる形となった。確かに「学校図書の取り扱い」に関しての教育委員会側の権限もある程度は存在するが、それを考慮したとしても学校側の諸対応には問題があった。この問題は幾つかの切り口から論じられている。事実上の閉架判断に至るまでの審議過程を問うもの、日本図書館協会（JLA）や全国 SLA から提出された閉架措置自体が「図書館の自由に関する宣言」（1979）に違反している旨を言及したものがあった⁴⁾。

無論、そうしたことも重要ではあるが、そもそも全国 SLA が設定した漫画に関する選定基準が、閉架のための基準として有効に機能することも、『はだしのゲン』閉架を招いた一因ではないだろうか。本来、選定基準は配架する図書を選定する際にその意義を発揮するが、学校図書館における漫画はその限りではないように見える。むしろ、学校外から批判があった場合に、容易に閉架に出来る、そうした防備の為の基準になっているのではないだろうか。そうした観点から見る場合、漫画に関する選定基準は、保守的要求に応える形の選定に大義名分を与える潜在的検閲性を有していると考えられる。では、漫画という図書資料に対して、選書基準はどのように設定されれば、一定の妥当性を担保し得るのか。本論考では、『はだしのゲン』を取り扱う際に用いられた論説を元に、閉架へと向かう選定基準運用の問題とその背景を述べ、それに関して一つの見解を示したい。

2. 漫画選定基準の妥当性

民間からの陳情第 46 号を受けて、『はだしのゲン』は、松江市議会教育民生委員会平成 24 年第 4 回 12 月定例会では不採択だったにも関わらず、松江市教育委員会事務当局の判断により閉架措置となった。しかし、その判断へと繋がった幾つかの要素は、全国 SLA の図書選定基準に照らし合わせた場合、それ自体に問題があるわけではなく、むしろ正しいとさえ言える。例えば、学校図書館の資料選定の際に用いられるであろう図書選定基準であるが、これの漫画に関する項目は、以下に示すように 13 の条項から形成されている。この基

準と照らし合わせた場合、問題の契機となった『はだしのゲン』に関する陳情は、陳情者の主観的な解釈を除いたとしても、幾つかの過激な文章や描写が図書選定基準に違反していることになる。

20 まんが

- (1) 絵の表現は優れているか。
- (2) 俗悪な言葉を故意に使っていないか。
- (3) 人間の尊厳性が守られているか。
- (4) ストーリーの展開に無理がないか。
- (5) 俗悪な表現で読者の心情に刺激を与えようとしていないか。
- (6) 悪や不正が讃えられるような内容になっていないか。
- (7) 戦争や暴力が、賛美されるような作品になっていないか。
- (8) 学問的な真理や歴史上の事実が故意に歪められたり、無視されたりしていないか。
- (9) 実在の人物については、公平な視野に立ち、事実に基づき正確に扱われているか。
- (10) 読者対象にふさわしい作品となっているか。
- (11) 原著のあるものは、原作の意が損なわれていないか。
- (12) 造本や用紙が多数の読者の利用に耐えられるようになっているか。
- (13) 完結されていないストーリーまんがは、原則として完結後、全巻を通して評価するものとする。

この論考では逐一取り上げるものではないが、平成 25 年 9 月の教育委員会の弁を借りるならば、「表現の一部が教育上過激」⁵⁾に見られる点では、『はだしのゲン』の違反は明確であったと思われる。だが、違反していた条項の議論だけで、閉架措置へ向かう妥当性を担保したことになるか、という点は問われる。そもそも、『はだしのゲン』は全国 SLA の推薦図書である。

学校図書館への漫画の配架に関して批判的観点から語る場合、その多くは文脈的連続性や全体性、社会的位置に関する言及を置き去りにしている。漫画を構成する「コマ」という単位により場面ごとに切りとられ、その一部の描写、文章事項が全体を決定付けている様な論調で語られている。それは、前述した 13 の選定条項を通覧することでも分かるだろう。収集対象としての評価に結びつくものは 3 つの条項 (1、10、13) だけであり、多くは「～していないか」という検査、JLA や全国 SLA が松江市教育委員会に向けた弁を借りるならば、「校閲」「検閲」として解釈可能な形をそもそも有している。

学校図書館の目的は基本原則として「学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養を育成」(学校図書館法第 2 条) することであり、そうであるならば図書を含む図書館資料の選定の際には、校種や教育目標等に合致するかという資料の価値とニーズに着目することが期待される。しかしおそらくそれゆえに、漫画のようにコマ単位の表現という非伝統的メディアは、選定基準の設定に際し部分的描写による減点方式的な評価が採用され、しばしばその漫画が配架にふさわしくないとする理由を探す為の「検閲性」を帯びることになる。こうした減点方式の評価は、コマ単位のチェックを行うためのものとしては適切ではあろうが、全体を捉えた図書館資料の評価という点では十全な妥当性を担保し得ない。

そして、今回の事例のように、社会的評価が既に定まっている漫画であっても、後に「不適切だ」という陳情が提出され、それに合致する該当箇所が一コマでもあった時には、現在の選定基準によると容易に「不良図書」としての扱いを受ける事へと繋がる。しかし、この類の評価の逆転に関しては、その図書評価者並びに関係者はより慎重さと専門性を要するだろう。そもそも、部分（コマ）の集積という見方が全体を評価する視点を凌駕し、そして社会的評価をも反転させてしまうということは、容易にはあってはならない。ましてや、それが学校に配架されている資料ならば、そもそも制限的に、利用対象に合わせて具体的に、選定・収集されていたものなのだろうから。

だが、現実として、『はだしのゲン』の事案の様な、その図書の取り扱いに疑問を呈さなくてはならないような事態はしばしば起こり得る。その主な原因としては、資料評価者の不在や、意思決定の手順が学校図書館の理念よりも諸権威を有する人の意向等、外部からの干渉が優先される、ということが考えられるだろう。しかし、そもそもの選定方針の問題点を指摘するならば、漫画について、他の図書を取り扱う際には存在する「何を収集し、配架するのか」という収集のための明確な条項が欠如していたことが挙げられる。学校図書館における漫画の選定基準をもう少し踏み込んで検討するべく、漫画の選定についての公立図書館の判断と合わせて、次に議論しよう。周知のことではあるが、図書館資料の収集に関しては、学校図書館と公立図書館では大きく方針の違いがあり、漫画においてはその意識差が明確に現れている。

3. 漫画の図書館への配架と社会的評価の関係

学校図書館と公立図書館は、漫画の配架根拠や選定基準を、一定程度は外部に委ねている。学校図書館での選書は全国 SLA の図書選定基準を基に判断を行っているものもあるが、学校独自の選定基準を有し掲げている場所は全国的に見てもごく少ないようである。いっぽうで、漫画に関しては、共通して、「極力置きたくはない」という姿勢がうかがわれる⁶⁾。先に触れた全国 SLA 図書選定基準や、文化としての要求水準に合致しないサブカルチャーとしての評価が与えられ続けてきたことから読み取れる⁷⁾。しかし、特に公立図書館では、現在は、漫画の収集や配架を行っている図書館自体は珍しくない。そうした中には選定・収集方針を掲げている例も存在するが、その収集の為の基準には幾らかの共通する姿勢がある。こうした公立図書館では、漫画資料は大別して三つの観点から選定・収集の門戸は開かれている。それは、学習・教養漫画、社会的評価が定まっている作品、漫画関連各賞を受賞した作品、漫画史・文化史の観点から資料的価値の高い作品、である。「調布市立図書館マンガ資料収集についての選定基準」（1994 策定）、「千代田区立図書館選定基準」（2008 改定）「くにたち図書館資料選定基準」（2007 改訂）、これ以外にも多くの図書館の資料収集・選定基準を通覧すると、そうした共通する姿勢を見て取ることが出来る。

学習・教養漫画は原則的には、よほど記載内容や描写に問題、史実・事実との乖離性がない場合は収集されており、公立図書館だけでなく、学校図書館でも教材の延長として配架される場合が多い。社会的評価の定まった作品は、全巻刊行されており、作品自体の時代性・芸術性を考慮して優秀なものが選定・収集されている。漫画関連各賞を受賞している作品とは、社会的評価及びある種の権威により具体的裏打ちがなされた良書として、選定・収集の対象になることがある。例外的なものとして、漫画の専門図書館である広島市立まんが図書館は資料性や時代性を重視した上で、一部の漫画雑誌の収集も行っている⁸⁾。

漫画という図書資料の取り扱いは、学校図書館と公立図書館の区別なく、ソフトとハードの二面において非常に手間がかかる。ソフト面では、全巻を通して見た場合の作品の意図、

描写や作品解釈の適切さ、正しい歴史描写など、判断の為に必要な精査項目が多岐にわたる。例えば、『はだしのゲン』の「俗悪な表現」という事項に関しても、戦争をある種のリアリズムに則して描写する際には一定の配慮こそ必要ではあるが、戦争の残酷さ、人間の悪徳性を示すのは主題からして当然のことである。この場合、その良し悪しの判断の基準として重視されるのは、先に述べた様な漫画作品の配架を決める際の基本的条項、その作品の社会的評価並びに文献的価値への理解である。また、ハードの面では、笠川昭治が指摘しているが、造本の簡易さ、巻数と予算、配架スペースの問題、管理に関わるものなどがその例として挙げられ、考慮しなくてはならない⁹⁾。

図書館内部の評価者が、個別具体的な描写事項による選定に先立って、漫画の選定に用いることが出来るものは、社会と慣習の整合性により形成された評価、つまり社会的評価である。つまり、社会的評価が前提にあつてこそ、初めて減点形式の条項による選定は行われるべきだろう。もしそれが出来ないのなら、漫画は最初から収集の対象になどすべきではないのである。もし、そうした全体への配慮がなく、冒頭で述べたような全国 SLA 基準のみに純粋に準ずるならば、学習・教養漫画以外は学校図書館に配架してはいけない、という結論が容易に導き出されてしまうことであるだろう。

「漫画」作品の選定・配架はおおよそ、学習・教養漫画や一部の例外、学級文庫などを除いては、一概的に言ってしまうと良書・名作主義により行われてきた。学校図書館には手塚治虫や多様な歴史描写作品、それこそ『はだしのゲン』などが選定され配架されている。しかし、実際にはそうしたものですら、慣習的かつ権威的な理由付けに依拠され過ぎており、何をもって良書、名作とするのかという点までは、学校と公立の図書館の担当者においてもおそらく理解が及んでいない。装丁や用紙の仕様などの造本、描写の適切性なども考慮されているのだろうが、全巻通しての内容解釈に関しては意識が薄く、文献・資料研究にまでは手が回らない状況が推測される。そうした、慣習は保守的な傾向性へと向かい、教育的配慮による図書の選定にも繋がる。そして、そうした要求は形態こそ時代に合わせて変えてはいるが、保護者の側からも継続的に要求されているものである。そして、それは選定に影響を与え、保守的傾向を深めているように思われる。

4. 作品の選定に影響を与える保護者と市民

毎日新聞調査におけるここ 10 年の読書項目の一覧を通覧すると、中高生の読書傾向はドラマ・映画原作小説やライトノベルなどの台頭が大きくみられ、良書主義的な読書要求は鳴りを潜めたかのように思われるかもしれない。しかし、漫画やそれに関連するコンテンツへの過保護、ある種のパターンリズムの干渉・要求は依然として強く保持され続けている。

保護者や市民が教育的な配慮を理由に図書館資料の選定に対して発言をすることは、決して悪いことではない。漫画は読書ではない、とする従来の見識とは似つつも若干異なるものではあるが、近年の傾向としては児童・生徒の道徳的・情緒的な判断能力の育成の読書面からの推進・保護として学校や販売元へ、良著・名著の導入や、その内容にまで要求を行う論調は確かにある。最近の事例として挙げるならば、暴力・性描写に関する漫画の書店での配置、取り扱いに関して定めた「東京都青少年の健全な育成に関する条例」をめぐる答申や回答にそうした論調をみることが出来るだろう。

保護者が子供向けと大人向けの区別が付けられず、そもそも漫画というメディアはすべて児童・生徒の目に触れるものであるということを前提とした論調は顕在化しやすい。文字と絵による表現事項・内容理解の簡易さ、そして文章以上にフレーズの残す印象の強さ、娯楽性の高さなど、その触れやすさから、そうした論調、とりわけ保守的観点とパターンリズム

的観点はすべて、統括してしまえば教育的配慮と呼んでしまえる。

保守的論調を形成するのは、保護者を代表とする顕在的な図書館間接利用者並びに関係者、市民である。学校図書館において保護者は他の公立図書館と違い、実際の利用者として顕現するわけではないが、学校という教育機関への働きかけの一環として要求を行う。これは、児童・生徒の健全な教養の育成に寄与するための図書を要求することへと繋がる。団体から個人まで、その規模こそ異なるが、要求は保守的もしくは保護的な傾向のどちらかへと向かいやすい。この保守性、というのは既存の文献理解や、時代的文脈、社会的評価を重視するような、良書・名作主義を補強する傾向である。

対して、パターンリズム的な要求は現在行われている枝葉的・部分的な選定に程良く合致するものであり、良書以上に無菌とも呼べる図書を要求する形となることもある。これは、一部の描写による全体のイメージの構築、と言ってしまうてもいいだろう。保守的な論調とパターンリズム的な要求、どちらにせよ保守的な方向性に収束するのではあるが、配架に対する具体的な社会的干渉を行ってくる。

ただ、現時点では先に言及した都条例の様な場合を除いて、保守的要求とパターンリズム的要求の間では対応のバランスが取られていると考えることも可能ではある。例えば、パターンリズム的な保護者、市民が「不良図書」に該当する描写事項を指摘し教育委員会や学校側に閉架を要求する場合、教育委員会・学校側はそれに従い、閉架ないし準閉架措置を実施するくぐりとなる可能性は高い。しかし、この状況において、それが良書や名作であり社会的評価が定まっているならば、保守的配架を重視する市民が開架の要求を出し、開架へと繋がるであろうことは想像に難くない。学校図書館にいるはずの学校図書館担当者が社会的責任者として不在であるために、十分にその役目を遂行できない、ということがこの展開にはある程度の前提としてあり、保護者や利用者に知らされずに学校長や関係機関の教育的配慮で閉架や開架が繰り返されている可能性も存在している。閉架措置が問題として取り上げられることは、保護者や地域市民の図書館への興味・関心から生じる喜ばしくも悩ましい事態であるのだ。

保護者・市民全体の風潮として、児童・生徒の育成に対して学校教育やその関係機関にその多くを求めるようになってきている。家族形態や地域との関連性、教育で言うところの学校・家庭・地域の三位一体型教育、は近年また盛り上がりを見せてはいる。しかし、実際には連携が困難になりつつある現代の社会構造上、家庭が学校に対して処理可能なもの以上を求めてしまう、というのは仕方ない部分はある。だが、そうした期待の増大の結果として、教科教諭だけではなく、学校図書館担当者に対しても、業務の幅の拡大やしわ寄せがきている部分がある。正確に言うのならば、潜在的に押し切っていた無理、慣習が歪みを生じさせている部分が表出してきた。通常の図書館業務に加え、周辺業務をこなすことにより、その専門性を昇華以前に保持することさえも困難になってきている。それが、図書館のコレクションに対する外部的評価・要求が顕在化した場合、それに容易に左右されてしまうという影響の受けやすさ、よく言えば柔軟性、別の言い方をすれば脆弱性を有してしまうことに繋がりがかねない。漫画は確かに、その娯楽性の高さから顕在化の対象に上がりやすいが、これは何も漫画に限定された問題ではない。

5. おわりに

松江市における『はだしのゲン』の閉架問題自体は2013年9月時点で開架へと推移し、松江市教育委員会もそれと同時に9月定例会にて全体の説明と自身らの見解を示した¹⁰⁾。教育委員会の見解としては、教育的配慮によるものとして要請したが図書の総体を見失った

枝葉的な分析で閉架にしたこと、事務的な処理により議論を尽くさなかったことには反省の弁を述べていた。だが、これを教育委員会の学校図書館や漫画作品への無理解として端的に断ずるのは些か早計だろう。たまたま既存の学校図書館の状況を浮き彫りにしたのが『はだしのゲン』であったというだけの話である。

1990年以降、国際社会への文化的コンテンツ発信の中で、対外的に漫画がサブカルチャーの位置を脱し、社会的・文化的地位を獲得したということ自体は間違いではない。現在も、漫画専門図書館の設立し、「COOL JAPAN」の名を冠し一部の漫画を文化事業の一部として発信するなどしている。しかし、対内的には本論で述べた様な、成熟とは程遠い状況が維持され続けているのは間違いない。図書館での選定基準の不備、社会的評価の曖昧さ、内部評価者の専門性、そして漫画がそもそも社会批判や風刺、世俗的な文化として発生したことに由来する根本的な性質の軽視など、課題は山積している。無論、文化として漫画を捉えるという意識の萌芽へと繋がる議論は必要だろうが、今はその議論には些か早いように思える。

漫画は取り扱いが困難な図書資料である。内部的評価は確立しておらず、文化的清濁性は素人目に見ると枝葉的に検閲しやすく、多くの保護者・市民・図書関係者も子供向けのサブカルチャー、娯楽図書として解している。だからこそ、それをどの様に扱うにせよ、各利用対象に合致した基準や指針や専門性が育まれた学校図書館担当者は必要であるのだ。そうではないのなら、同じことはまた繰り返し、今回の事例の様に事後対応となるだろう。漫画を文化として語るにはあまりに、それが取り扱われる環境は中途半端な潔癖さを有しており、そして教育を議論する環境としても未成熟なのである。

さて、この『はだしのゲン』閉架問題自体も、既に終わったものとして捉えるのは早計である。昨年、松江市教育委員会の定例会後に、同様の陳述が東京都と都内の区市の教育委員会・議会に14件提出されたことが東京新聞調べで判明した¹⁾。松江市教育委員会の対応を踏まえ、あらゆる請願に応じないとする見解が多い一方、足立区議会では継続審議、中野区教育委員会では平成26年2月以降に審議入りとなる。また、大阪府泉佐野市でも2014年1月に、千代松大耕市長の「表現が不適切」であるとの要請を受けた中藤辰洋教育長の指示により、『はだしのゲン』が市内の18の市立小中学校の中の13校から回収されたことが同年3月20日付の各報道で判明している。²⁾ 私見ではあるが、これらの議論や対応の着地点は「読書の際に児童・生徒に対して一定の配慮や指導を要する」といった類の宣言に留まる可能性は高く、図書館で漫画資料の取り扱いや読書指導に関する議論までは発展はしないと考える。それは不幸なことだが、そうであるにしても、「校閲性」や「描写の優劣」、「図書館の自由に関する宣言」を学校でどの程度まで斟酌すべきなのかを問うダイレクトな問題として今後も注目していく必要がある。それにより、図書館と教育機関の狭間に存在する学校図書館という施設の今後の在り方、その責任の所在を今一度問い直す契機にもなるだろう。

¹⁾ 小出晋之将,「教具としての「まんが」の位置」『境界を超えて—比較文明学の現在—』No.14, 2014, p.86-90.

²⁾ 毎日新聞東京本社広告局『読書世論調査・学校読書調査 2002年版』毎日新聞社, 2002.

³⁾ 松江市平成24年第4回12月定例会12月5日01号, p.3. (<http://www.gijiroku.net/city.matsue/> から閲覧可能(参照2014-03-23))の南波巖議員の以下の発言を参照。

閉会中の継続審査となっておりました陳情3件につきまして、去る11月26日に委員会を開催し審査をいたしましたので、その経過と結果について御報告申し上げます。

陳情第46号「松江市の小中学校の図書室から「はだしのゲン」の撤去を求めることについて」では、執行部から、追加の見解を聞いた後、質疑では、全10巻の漫画の中でいろいろ問

題があるとも言われているがどのような問題かとの質疑に対しては、執行部より、1 巻から 4 巻または 5 巻までが第 1 部というふうに言われているが、暴力的なシーンなど、やや過激と言われるものは後半部分が多いと感じている。陳情に添付された資料も 10 巻の部分であるとの答弁がありました。討論では、一委員から、当初の教育委員会の見解では、映画が文部省や全国 PTA 協議会の推薦を受けていたり、漫画が中四国の県庁所在市の小中学校の図書室に置いてあることから優良図書と考えているということであった。

しかし、1 巻から 10 巻までを見ると、時代ごとにだんだんとエスカレートして大変過激な文章や絵がこの漫画を占めている状況であり、第 1 部までとそれ以降のものが違うものというのではなく、「はだしのゲン」という漫画そのものが、「不良図書」と捉えられと思う。当初の優良図書としての根本が崩れたということであれば、やはり教育委員会みずからが判断をし、適切な処置をするべきであろうと思うとの意見がありました。また、不採択とすべきものとして、一委員から、表現に若干過激な面もあるが、全体としては戦争の悲惨さ、あるいは平和のとうとさを訴えているものと思っている。1980 年代から多くの図書館に置かれている状況であり、平和教育の参考書として捉えられている側面が非常に強いようである。そういう面から考えると、小中学校の図書室に置いてあってもおかしい話ではないし、図書室に置くことの是非について議会が判断することには疑問があるので不採択とすべきと考えたとの意見がありました。採決の結果、陳情第 46 号は挙手する者はなく不採択とすべきものと決しました。

- 4) 日本図書館協会図書館の自由委員会「中沢啓治著「はだしのゲン」の利用制限について（要望）」
<http://www.jla.or.jp/portals/0/html/jiyu/hadashinogen.html>, (参照 2014-03-23).

全国学校図書館協議会「「はだしのゲン」の利用制限等に対する声明」<http://www.j-sla.or.jp/pdfs/seimei-hadashinogen.pdf>, (参照 2014-03-23).

- 5) 松江市議会平成 25 年第 4 回 9 月定例会 9 月 9 日 02 号, p.49. (<http://www.gijiroku.net/city.matsue/> から閲覧可能 (参照 2014-03-23)) の清水伸夫教育長の以下の発言を参照。学校側に行う要請の内容を決定した際の事務当局の議事録はとられていないため、要請決定の時の議論の内容は清水教育長の答弁の内容より把握するしかない。

それでは、私のほうから「はだしのゲン」関係のお尋ねにお答えをしたいと思います。

まず、全国からの問い合わせ件数と数字的なものでございますが、8 月 16 日から 9 月 6 日までを取りまとめたところでございます。全国からの問い合わせ件数は 3,529 件でございます。閉架に賛成の意見が 1,136 件、閉架に反対の意見は 2,116 件、賛成の意見が 32%、それから閉架の反対の意見が 60%、どちらでもない委員会への批判が合わせて 277 件、8%という結果でございます。それから、要望書が出ておりますが、37 件でございます。これは閉架に賛成が 22 件、閉架に反対が 35 件ということでございます。それから、電子署名を添えた陳情では、2 万 1,156 名の署名簿が添えられていたところでございます。

それから、22 点目でございますが、議会で陳情を不採択にした後に教育委員会事務局はなぜ議会の総意でない意見を取り上げて閉架という判断をされたのかということでございます。

もともと陳情というのは、学校図書館から漫画「はだしのゲン」を撤去してほしいという陳情でございました。これを議会で不採択とされたわけでございます。教育委員会事務局といたしましては、この陳情があったことをきっかけに改めて、当時の事務局ですが、「はだしのゲン」を詳細に調べて、学校図書館での取り扱いについて協議、検討をいたしたということでございます。その結果、表現の一部が教育上過激ではないかと判断をして、児童生徒の閲覧については教育的配慮が必要であり、閲覧の一部を制限する措置をとったということでございます。

ただ、この際に、形を変えて閲覧の制約をしたわけでございますが、教育委員会はもちろんですが、陳情に関連する事項であるとして、議会に対しても報告することが適当であった

と考えております。

それからもう一点、閲覧制限は図書館の自由に関する宣言に照らしても、教育委員会事務局の権力介入ではないかと、今後この教訓をどのように教育行政に生かすかというお尋ねでございます。

本来、教育委員会事務局というのは、学校に対して指導助言をする立場にあると考えております。このたびの閲覧のいわゆる制約を伴うお願いは、学校図書館におきます子供の発達段階に応じた教育的配慮を求めたものであり、図書館の自由に関する宣言は十分尊重するわけでございますが、そのことを尊重したとしても、これは必ずしも権力の介入ということではないんじゃないか、当たらないんじゃないかなと考えております。

しかしながら、校長会への要請の方法や、広く意見を求めなかった点、それからそれまでの手続について認識の甘さや問題があったということは否定できないと思っております。今後、教育委員会や校長会との十分な意思疎通や、あるいは共通理解を図ることが最も重要だろうと思っています。今後、一層の連携強化を目指してまいりたいなというふうに考えております。以上でございます。

- 6) 例えば「八王子市図書館資料収集要綱」では、「10 漫画については、原則として選択しない。」とあり、収集する類のものは例外的にあげられている（八王子市「八王子市図書館資料収集要綱」https://www.city.hachioji.tokyo.jp/seisaku/reiki_rui/yoko/toshokan_yoko.html, (参照 2014-03-23).)。
- 7) こうした漫画に関する論調、その変化は近代図書館史を通覧するか、川瀬綾子がまとめているものが分かりやすい（川瀬綾子「図書館界の言説を焦点とした公立図書館における収集方針とマンガの取扱に関する考察～都道府県立・政令指定都市立図書館を中心に～」『情報学』Vol.9, No.2, 2012, p.1-15.）。
- 8) 広島市「資料収集方針」<http://www.library.city.hiroshima.jp/directory/policy/index.html>, (参照 2014-03-23)。
- 9) 笠川昭治「学校図書館とまんが図書館が苦手なまんがと上手に付き合う方法」『現代の図書館』Vol.47, No.4, 2009, p.258-264。
- 10) 前掲 5) を参照。
- 11) 東京新聞「都内で撤去請願 教委・議会に 14 件」平成 26 年 2 月 21 日。 <http://www.tokyo-np.co.jp/s/article/2014022190070518.html>, (参照 2014-03-23)。
- 12) 朝日新聞「「はだしのゲン」回収泉佐野の市立の小中図書館」平成 26 年 2 月 21 日。 <http://www.asahi.com/articles/ASG3M62WFG3MPTIL01S.html>, (参照 2014-03-23)。

参考文献

- 毎日新聞東京本社広告局『読書世論調査・学校読書調査 2003 年版』毎日新聞社, 2003.
 毎日新聞東京本社広告局『読書世論調査・学校読書調査 2004 年版』毎日新聞社, 2004.
 毎日新聞東京本社広告局『読書世論調査・学校読書調査 2005 年版』毎日新聞社, 2005.
 毎日新聞東京本社広告局『読書世論調査・学校読書調査 2006 年版』毎日新聞社, 2006.
 毎日新聞東京本社広告局『読書世論調査・学校読書調査 2007 年版』毎日新聞社, 2007.
 毎日新聞東京本社広告局『読書世論調査・学校読書調査 2008 年版』毎日新聞社, 2008.
 毎日新聞東京本社広告局『読書世論調査・学校読書調査 2009 年版』毎日新聞社, 2009.
 毎日新聞東京本社広告局『読書世論調査・学校読書調査 2010 年版』毎日新聞社, 2010.
 毎日新聞東京本社広告局『読書世論調査・学校読書調査 2011 年版』毎日新聞社, 2011.
 毎日新聞東京本社広告局『読書世論調査・学校読書調査 2012 年版』毎日新聞社, 2012.
 毎日新聞東京本社広告局『読書世論調査・学校読書調査 2013 年版』毎日新聞社, 2013.
 三浦逸雄, 根本彰『コレクションの形成と管理』雄山閣出版, 1993 (講座図書館の理論と実践第 2 巻)。